

狩野芳崖と四天王

近代日本画もうひとつの水脈



岡倉秋水「不動明王」(部分)個人蔵

芳崖四天王って?



岡不崩「菊花図」(部分)福井県立美術館



本多天城「山水」(部分)川越市立美術館



高屋肖哲「武帝達磨謁見図」(右隻・部分)東京・浅草寺

福井県立美術館

2017年9月15日(金) ▶ 10月22日(日)

師・狩野芳崖と4人の弟子「芳崖四天王」の作品一堂に

“近代日本画の父”と称される狩野芳崖の下には4人の高弟がいました。岡倉秋水、岡不崩、高屋肖哲、本多天城の4人です。彼らは芳崖の最晩年に師事し、また芳崖の絶筆「悲母觀音図」の制作を間近で目撃しています。そんな彼らは開校間もない東京美術学校において、同期生たちから「芳崖四天王」と称され、一目置かれる存在であったと伝えられています。

本展は「芳崖四天王」に注目した初めての展覧会です。多数の新出作品から、知られざる四天王の人と画業を紹介します。また師・芳崖を中心に、狩野派の最後を飾る画家たちの作品や、四天王と同じ時代を生き、岡倉覚三（天心）と共に日本画の革新に挑んだ横山大観、下村觀山、菱田春草ら日本美術院の作品を一堂に会します。

芳崖の創った近代日本画の水脈を辿り、その魅力あふれる作品をご覧いただきます。



狩野芳崖肖像写真

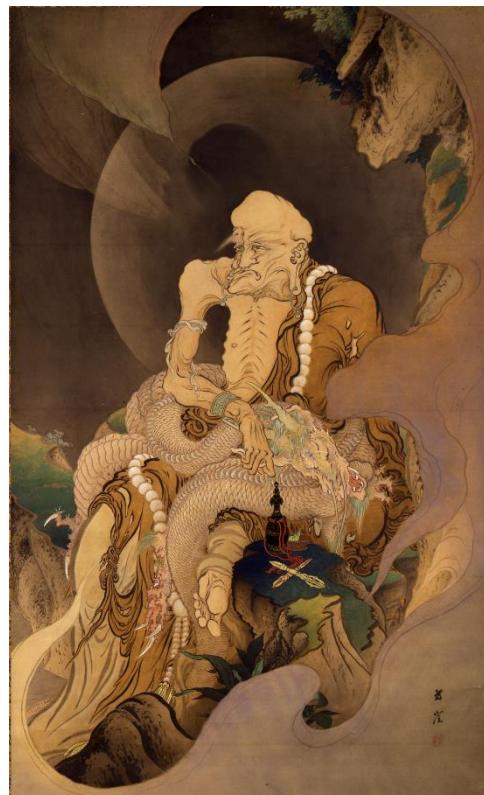
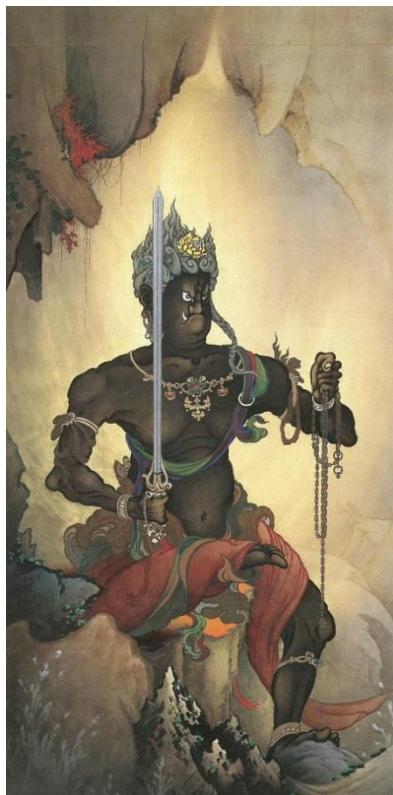
本展覧会の見どころ

- 1 木挽町狩野家の「龍虎」と称された狩野芳崖と橋本雅邦の名品が揃います。重要文化財2点を含む、近代日本画の黎明期を彩る数々の作品をご覧ください。
- 2 「芳崖四天王」の作品は、ほぼすべてが初公開。彼らの知られざる画業をご覧いただきます。普段見ることができない秘蔵の作品や、高屋肖哲の高野山にある障壁画も並びます。
- 3 横山大観、下村觀山、菱田春草ら、四天王と同時代に活躍した画家の作品も一堂に。四天王の作品との違いにご注目下さい。近代日本画の多様な「水脈」がきっと見えてくるでしょう。

第1章 狩野芳崖と狩野派の画家たち—雅邦、立嶽、友信—

室町時代から400年続いた日本最大の絵師集団である狩野派。狩野芳崖や橋本雅邦らは、その終焉を飾る狩野派最後の画家であり、西洋美術との相克のなかで伝統的な日本美術の革新を志し、のちの日本画の方向性を創りだしていきます。本章では芳崖を起点に、四天王が学んだ芳崖と同時代の画家、雅邦や木村立嶽の作品を紹介し、狩野派の正統を受け継ぎながら、近代日本の黎明期を生き抜いた輝かしい模索の足跡を紹介します。

【狩野芳崖】



左：狩野芳崖「不動明王」（重要文化財）一幅、東京藝術大学

中：狩野芳崖「悲母觀音 下図」（重要文化財）一幅、東京藝術大学

右：狩野芳崖「伏龍羅漢図」一幅、福井県立美術館

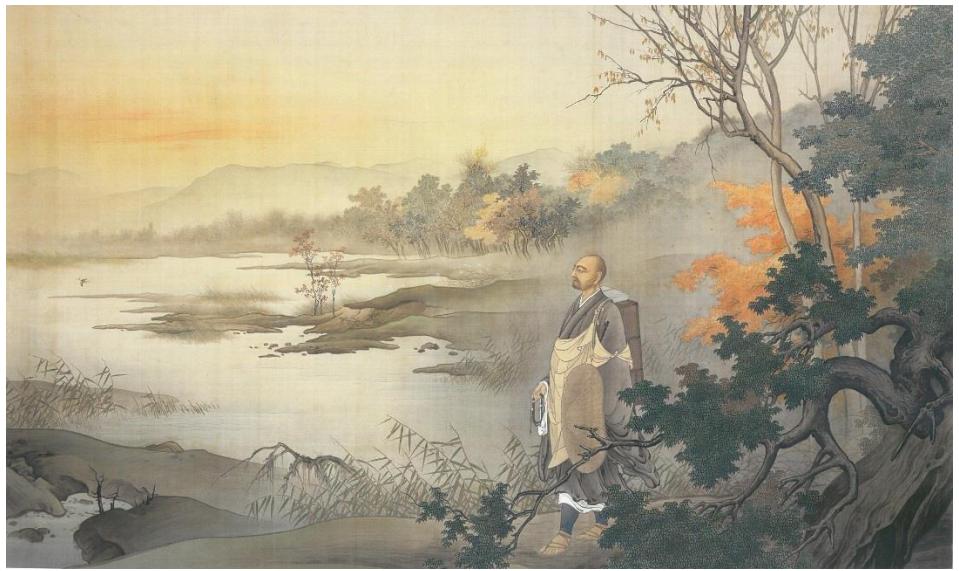


左：狩野芳崖「壽老人」一幅、泉屋博古館分館

右：狩野芳崖「懸崖山水図」一幅、下関市立美術館



【橋本雅邦】



左：橋本雅邦「三井寺」一幅、静岡県立美術館

右：橋本雅邦「西行法師図」一幅、

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館

【木村立嶽】



左：木村立嶽「郭僕之図」一幅、個人蔵

右：木村立嶽「樓閣山水図」一幅、個人蔵

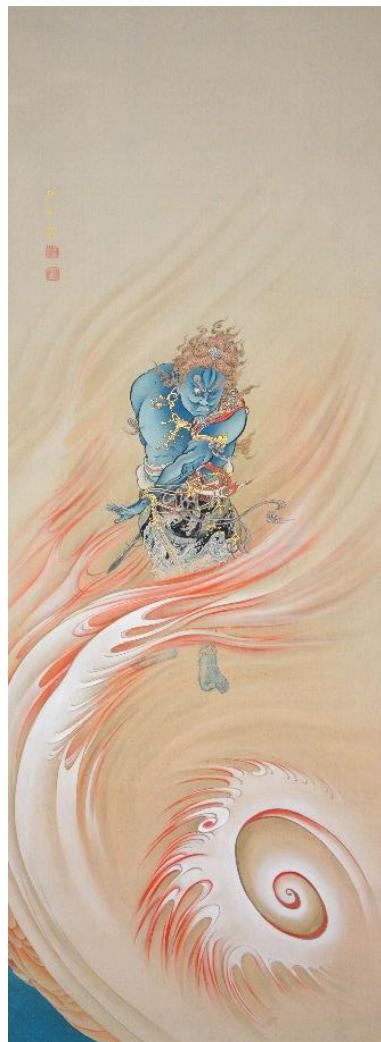
第2章 芳崖四天王—芳崖芸術を受け継ぐ者—

狩野芳崖の薰陶を受けた4人の高弟—岡倉秋水、岡不崩、高屋肖哲、本多天城一は、早くから鑑画会を舞台に活躍し、東京美術学校入学後は「芳崖四天王」と称されるなど、日本画の新しい担い手として前途を嘱望されていました。しかしながら師・芳崖を亡くした後は、次第に画壇と距離を置き、それぞれ表舞台からその姿を消していきます。東京美術学校を中退し教育者に転じた者、本草学の研究を志した者、あるいは高野山に参籠し仏教美術研究に傾倒する者など、いずれも時代のはざまに埋没し、今では忘れ去られた画家といえるでしょう。

四天王の存在と活動は、芳崖から東京美術学校、日本美術院へと続く革新的な近代日本画の流れとは異なる「もうひとつの水脈」であり、近代日本画の多様性を示しています。本章ではその水脈を辿ることで、明治維新により終焉を迎えた狩野派のアフターストーリーを見つめ直します。

◎岡倉秋水（1867～1950）—岡倉覚三（天心）の甥、そして芳崖顕彰における最大功労者—

本名覚平は、慶応3年12月11日に福井県福井市老松下町で生まれました。秋水は岡倉覚三（天心）の六歳年下の甥にあたり、上京した当初は岡倉の家に書生として住み、その後芳崖の門に入ります。明治22年には第一回入学生として東京美術学校に入りますが、翌年7月に、女子高等師範で毛筆画を教えるために岡不崩と共に東京美術学校を退学します。その後明治29年11月から、学習院で教鞭を揮い教育者として長く芳崖の顕彰に最も積極的に取り組んだ一人で、数回にわたる画集の刊行や遺墨展、芳崖作品の鑑定を行っています。秋水は「矢面」に見られる二等辺三角形の安定した構図や、「奇襲」にみられる物語の前後を暗示する構成など歴史人物画に優作を残しています。



左：岡倉秋水「不動明王」一幅、個人蔵

右：岡倉秋水「矢面」一幅、福井県立美術館

◎岡不崩 (1869–1940) 一本草学研究を志した学者画家—

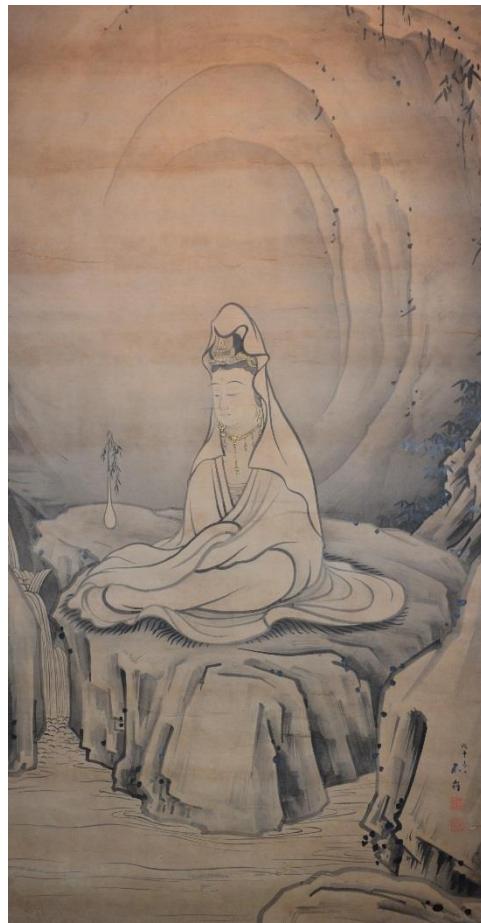
本名吉寿(よしひさ)も秋水と同じく越前生まれですが、岡家は越前の東部に位置する大野藩の藩士の家です。しかも不崩の母は大野藩の重臣・内山隆佐の子で、内山隆佐とその兄内山七郎衛門は、越前大野藩7代藩主・土井利忠の命によって蝦夷地開拓を主導した人物です。このような家系に生まれた不崩もまた、幼少より武を好み、軍人になることを志望していました。しかしながら、明治5年、不崩3歳の頃に父を病氣で亡くし、母も続けて亡くしています。その後、祖母と縁戚を頼って上京した不崩は、はじめ狩野友信門に入り、友信の勧めにより芳崖の門を叩きます。その後、東京美術学校に入学しますが、秋水と同様に学校を辞めて教育者に転じますが、後半生は本草学に傾倒し、数多くの著書を残しました。不崩の作品には鮮やかな草花図が多く、いずれも植物画として正確であり、画家の制作上の嗜好が窺えます。



左：岡不崩「菊花図」対幅、福井県立美術館



右：岡不崩「白衣觀音図」一幅、東京・宗慶寺



◎高屋肖哲 (1866–1945) —“仏画師”を自称した異才—

本姓は疋田、本名は徳次郎といい、慶応2年11月2日に現岐阜県大垣市に士族の子として生まれました。画家になるために19歳で上京し、芳崖に師事します。芳崖没後は東京美術学校入学し、卒業後は短期間ですが美術学校の图案科の助教を務めています。その後石川県金沢で図画教師として務めますが、「仏画師」を志し、高野山での参籠や各地の寺院を訪ね歩くなど放浪します。肖哲はこのように中央画壇から離れ独自の道を模索した為、美術史の表舞台から消えていった画家です。

「仏画師」を自ら称した肖哲は、仏教画題の作品を多く遺してます。なかでも肖哲は、師・芳崖も描いた観音像を生涯に渡って描き続けました。また肖哲は記録魔として知られ、自身が見聞した事柄を細かに記録し、膨大な量の忘備録や下図、画稿を残しました。これらの作品、資料から肖哲の仏教美術研究の成果が見て取れます。



左：高屋肖哲「千児觀音図下絵」金沢美術工芸大学

右：高屋肖哲「武帝達磨謁見図」六曲一双、東京・浅草寺



高屋肖哲「高野物狂（表広間襖）」高野山・三宝院 ※全26面のうち、8面が出展されます。

◎本多天城 (ほんだ てんじょう) (1867~1946) —芳崖門下の秀才—

本多天城、本名は佑輔、関宿藩の藩士の子として、江戸深川の藩邸に慶応3年7月に生まれました。幼少より絵や彫り物に親しみ、その早熟ぶりで周りを驚かせていたと伝えられています。明治18年に芳崖へ入門します。芳崖没後は東京美術学校に入学、明治26年に卒業し、29年から同校で助教授を務めています。美術学校の騒動では、いったん辞職組に加わりますが、最終的には留任し、34年まで助教授を務めています。天城もまた、秋水と同じく師・芳崖の顕彰に携わり、画集の発行や遺墨展などに関わりました。

天城は、伝統的な山水画の枠組みに西洋的な視覚を巧みに取り込み、空間描写に優れた作品を多く残しています。



本多天城「山水」一幅、川越市立美術館



本多天城「蘇武」一幅、東京国立博物館

第3章 四天王の同窓生たち=「朦朧体の四天王」による革新画風

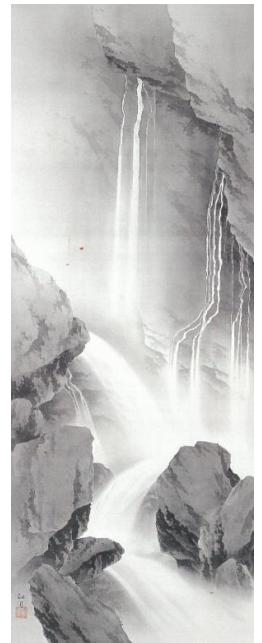
本章では岡倉覚三（天心）と共に、先駆的な表現を試みた横山大観、下村觀山、菱田春草、西郷孤月ら日本美術院の画家を取り上げます。明治30年代における朦朧体の実験は広く知られていますが、彼らはそれまでの概念を刷新し、時にラディカルに新しい表現を模索していました。四天王の作品と並べて紹介することで、芳崖が創った多様な流れを検証します。



左：菱田春草「春色」一幅、豊田市美術館



中：横山大観「夕立」一幅、茨城県近代美術館



右：西郷孤月「飛瀑」対幅、長野県信濃美術館

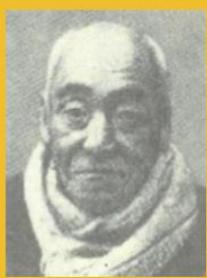


下村觀山「寿星」六曲一双、福井県立美術館



狩野芳崖と四天王 人物相関図

芳崖の周辺



狩野友信
(1843~1912)

勝川院四天王



狩野芳崖 (1828~1888)



橋本雅邦
(1835~1908)



木村立嶽
(1828~1890)

狩野勝玉

芳崖四天王



岡倉秋水 (1868~1950)



岡 不崩 (1869~1940)



本多天城 (1867~1946)

日本美術院



岡倉覚三 (1863~1913)



高屋肖哲 (1867~1946)

そのほか芳崖門人
前田錦楓・山本松谿



下村觀山
(1873~1930)



菱田春草
(1874-1911)



木村武山 (1876~1942)



アーネスト・F・フェノロサ
(1853~1908)

雅邦(朦朧体)四天王



横山大観
(1868~1958)



西郷孤月
(1873-1912)

福井県立美術館開館 40 周年特別企画展 第 2 弾
「狩野芳崖と四天王－近代日本画もうひとつの水脈－」

[会期] 平成 29 年 9 月 15 日（金）～10 月 22 日（日）

[休館日] 9 月 19 日（火）、25 日（月）、10 月 2 日（月）、10 日（火）、16 日（月）

[開館時間] 午前 9 時から午後 5 時（入館は閉館 30 分前まで）※9 月 15 日（金）のみ午前 11 時開館。

[観覧料] 一般・大学生 1,000 円（団体 800 円）、リピーター券 1,500 円、高校生以下無料

※20 名以上の団体は 2 割引。※学生の方は学生証の提示が必要です。

※障害者手帳等をお持ちの方とその介助者 1 名半額。

※同時開催「県立美術館名品 200 選」展の「ワンコインパスポート」をご提示の方は一般・大学生の観覧券が 2 割引。（リピーター券は対象外）

[主催] 福井県立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

[共催] 福井放送株式会社

[協賛] ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜

[協力] 日本通運

[関連イベント]

①手塚雄二特別館長ギャラリートーク（要観覧券・申込不要）

日 時：9 月 15 日（金）13：45～

場 所：会場（2 階展示室）

②記念講演会「近代日本画と西洋絵画」（聴講無料・申込不要）

日 時：9 月 23 日（土）午後 2 時から

講 師：三浦篤氏（東京大学教授）

場 所：当館講堂

③特別対談「芳崖四天王コトハジメ」（聴講無料・申込不要）

日 時：10 月 14 日（土）14:00～

登壇者：塩谷純氏（東京文化財研究所文化財情報資料部 近・現代視覚芸術研究室長）

× 椎野晃史（当館学芸員）

場 所：当館講堂

④トークサロン（要申し込み・ドリンク代別途必要）

日 時：10 月 1 日（日）、15 日（日）各 17：00～18：00

場 所：美術館喫茶室ニホ（美術館の正面左）

内 容：本展を担当した学芸員が、展覧会の苦労話や裏話をお話します。

申込先：文化振興課または美術館喫茶室ニホに電話かメールでお申し込みください。

文化振興課 電話：0776-20-0580 メール：bunshin@pref.fukui.lg.jp

美術館喫茶室ニホ 電話：0776-43-0310

[巡回先（予定）]

①山梨県立美術館 平成 29 年 11 月 3 日（金）～12 月 17 日（日）

②泉屋博古館分館 平成 30 年 9 月 15 日（土）～10 月 28 日（日）

[その他]

①作品保護の為、一部の作品は展示替え致します。詳細は当館HP（9月中旬掲載予定）をご確認下さい。

②お得なリピーター券！作品の展示替えのため、会期中 2 回ご入場いただけますリピーター券をご用意しました。2 回ご来館される場合はお得なリピーター券をご利用下さい。

③同時開催企画展（～10 月 22 日（日）まで）

開館 40 周年特別企画展 第 1 弹

「県立美術館 200 選～コレクションが魅せる日本美術の 400 年 伝統・革新・発展～」

福井県立美術館 40 年間のコレクション約 3,000 点から優品 200 点を一挙公開！

[アクセス]



- 福井鉄道・えちぜん鉄道／「田原町駅」下車徒歩約 8 分
- コミュニティバスすまいる（100 円）／JR 福井駅西口（6 番のりば）より、田原・文京方面線 15 分「県立美術館前」下車。
- 京福バス／JR 福井駅西口（2 番のりば）より、福井総合病院線（23・26 系統）「藤島高校前」下車。※日曜・祝日は運休
- 車・タクシー／JR 福井駅より約 8 分、北陸自動車道福井北 IC より約 15 分。
ご来場はできるだけ公共交通機関をご利用下さい。

福井県立美術館 担当：椎野晃史

〒910-0017 福井市文京 3-16-1

TEL:0776-25-0452 FAX:0776-25-0459

E-mail:a-shiino-vl@pref.fukui.lg.jp

<http://info.pref.fukui.jp/bunka/bijutukan/bunka1.html>